

今月のみことば 2018年3月

**「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。
あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。」**

(マルコの福音書10章43、44節)

平昌オリンピックで、感動を呼ぶ競技が連日のように伝えられているが、今から20年前の長野冬季オリンピックのスキージャンプにおいても、隠れたドラマがあった。

金メダルを期待された日本は、何と一本目が終わった時点でまさかの4位。しかも吹雪の勢いが増し、このままでは試合が中断となって、日本がメダルを逃す、という絶体絶命のピンチに見舞われた。

「試験飛躍員」(テストジャンパー)が飛んで競技に支障がないことが証明できれば再開できるように、という日本側の妥協案が了承された。25人の飛躍員は、いずれももう少しのところまで自分がオリンピックの舞台に立てたかもしれないすぐれたジャンパーたちであったが、今は、どれほどの大飛躍をしようと、記録にも残らないテストジャンプを求められたのである。

しかし、断るジャンパーはだれもいなかった。それどころか皆が、危険を伴う悪天候の中、ここぞとばかりベストのジャンプを次々に繰り出したのである。ところが外国人役員たちは海外でも有名であった西方仁也選手のジャンプを見て最終判断をする、と言い出した。リレハンメルオリンピックで銀メダルに輝いたものの、体の故障に泣き、あと一步のところまで出場の選考にもれた選手である。試合が続行されるかどうかは西方選手の出来いかんということになった。そして、西方選手は飛んだ。結果は K 点超えの大ジャンプであった。

この後、日本が奇跡の大逆転を成功させて金メダルに輝いたことは多くの人々の記憶に残ることとなった。しかし、その陰には、「試験飛行員」という、脚光を浴びることを求めなかったアスリートの一団がいたのである。

聖書が教える生き方もまた、自分が輝くためではなく、他の人が輝くために自分に何ができるかを問う、「しもべ」としての生き方である。

「試験飛行員」という、この上なく地味な任務に命がけで取り組んだアスリートたちのしたことは、本来の「しもべ」の意味を浮き彫りにしてくれている。彼らもどれほどオリンピックの栄光に憧れたことであろう。

しかし、自分の栄光ではなく、他の人のために全力を尽くしたその姿こそは、「しもべとして仕えること」の意味をわかりやすく示してくれている。

そして、歴史上最大にして最高の「しもべ」とは、神の御子でありながら、私たち罪人が天の栄光にあずかれるようにと、自らが恥辱の苦難の十字架に架けられて、いのちを投げ出してくださった御方、預言者イザヤが「苦難のしもべ」と呼んだイエス・キリストであることを思い出さなければいけない。



金メダルに輝いた日本人選手たち



自らの栄光を求めなかった
テスト・ジャンパーたち